

金沢文庫本『心要洞玄記』について

天常富納

金沢文庫資料には法藏・澄觀関係およびその註釈書を中心として、およそ一千冊に及ぶ華嚴関係典籍が含まれておる、鎌倉・南北朝期における華嚴教学研究の重要な資料となつてゐる。この中には『華嚴經綱要』『十二因縁觀』『華嚴論節要』をはじめとして、金沢文庫のみに傳えられてゐる稀観本が数多く含まれてゐるが、智照撰にかかる『心要洞玄記』（現在は東京都目黒区駒場四丁三十五五、前田育徳会尊経閣文庫所蔵）もその一つである。『心要洞玄記』はその書名からも伺われるよう、清涼澄觀の『答順宗心要法門』の註釈書である。從來『答順宗心要法門』の註釈書としては圭峯宗密の『答順宗心要法門註』⁽¹⁾がわずかに知られ、大日本続藏經に収録されているが、その註釈は余りにも簡要に過ぎ容易に理解し難いものであった。それに比し

この『心要洞玄記』の註釈は逐語的であるとともに、博引傍証、正に委曲を尽したもので、澄觀における禪思想の理解は云うまでもなく、禪教一致思想の解明、さらには仏教諸宗における禪の受容と云う面からも貴重な資料としなければならない。そこでここでは紙数の関係もあり、詳細な内容の検討は後日ゆることにして、取り敢えず『心要洞玄記』の本文を紹介するとともに、その成立等について少しく考察を加えてみたい。

『答順宗心要法門』は云うまでもなく『答皇太子問心要法門』の註釈書である。從來『答順宗心要法門』の註釈書と書いては圭峯宗密の『答順宗心要法門註』⁽¹⁾がわずかに知られ、『宋高僧傳』に「順宗在春宮、嘗垂教令述了義一卷心要一卷、并食肉得罪因縁」⁽²⁾とあるように、澄觀が『華嚴經了義』『食肉得罪因縁』とともに皇太子時代の順宗のため

に著わしたものである。しかも『華嚴經疏』をはじめとする三十五種の著書⁽³⁾の中、澄觀における禪思想をもつとも簡約な形で述べたものとして、後世禪教二門に大きな影響を与えていた。それは宋・道原編『景德傳燈錄』、明・瞿汝稷撰『指月錄』および凝然撰『華嚴法界義鏡』等から十分伺い知ることができる。『景德傳燈錄』においては卷第三十「銘記箴歌」の中に「傅大士心王銘」「僧璨大師信心銘」「牛頭法融禪師心銘」「南嶽大師參同契」「永嘉真覺大師証道歌」等とともに、「五台山鎮國大師澄觀答皇太子問心要」として収録され、『指月錄』卷第二においても澄觀の略伝を述べた後に『心要』の全文が引文されている。⁽⁵⁾また凝然は『華嚴法界義鏡』卷上の第五章「観行の状貌」において、華嚴における観門の枢要として(1)法界観(2)華嚴三昧観(3)妄尽還源観(4)普賢観(5)唯識観(6)華藏世界観(7)三聖円融観(8)華嚴心要観(9)五蘊観(10)十二因縁観の十種を挙げているが、第八の華嚴心要観については「華嚴心要観一巻、清涼師撰、大唐第二十代主順宗皇帝、在春宮位之時、貞元十一年乙亥^{當日本國延暦十四年}間心法於清涼大師、大師即答彼所問、作心要一巻、陳一乘心道、直指法體、正顯自心、見即成観、解即滿行、寔為學者之精要、行人之秘術者也」と述

べ、学者の精要、行人の秘術として非常に高く評価している。また華嚴觀法の中でもっとも重要なものは三聖圓融觀と唯識觀であるとしながらも、「其心要觀與此合明三聖」⁽⁷⁾となし、また「頓悟之道不可思議、總而言之、一心之法貫通自在、旧來寂靜、旧來明朗、旧來証窮、旧來業用、與新修一合與真証冥、清涼大師心要之中直指三己體⁽⁸⁾陳述炳然、故彼文云」として全文を引文し、観行状貌の結語としていることは注目しなければならない。

さて『心要洞玄記』は一巻一帖、褐色の帙入り、折本装(29.5×11cm、63折)、無界、毎葉六行、各行二十字、楮紙、端書に「洞玄記」とあり、巻頭には「心要洞玄記」と題書してある。本文は著者の補訂潤色によつて量的に約半分近く書き改められているが、改作以前の部分にはかなり丁寧な訓点・朱点(句読点)が施され、わずかではあるが声点もみられる。

著者および撰述年次については、その奥書から鎌倉松谷寺住持智照が応長二年(一一二二)三月二十日著わしたことが知られる。また帙の下部中央に「湛睿」と記されているのは、金沢称名寺第三代湛睿の手沢を証するものであり、本書が智照から湛睿に傳領されたことが知られる。⁽¹⁰⁾本

文は一筆であるが、智照による校合・湛睿による挿入（但し抹消してある）がみられる他、筆者不明の『大慧禪師御書』（抜萃）の裏書がある。本文の書風は張即之の影響がみられ、極めて端正であるが、勒の運筆法に一種独特なものがある。前後の事情から智照の依頼により書写されたことが知られるが、誰れの手になったものか不明である。しかし金沢文庫資料中にはこれと同筆の『華嚴還源觀疏抄補解并序』『比丘尼鈔糾補資行錄』『因明入正理論』『註金師子章序』『夢庵和尚節釈肇論』『能顯中辯慧日論』『菩提心論』『後七日御修法記』『後七日晦日十八日法』『後七日広』『孝經』『帝王略論』等があるばかりか、『起信論義記』『華嚴經探玄記』『華嚴演義鈔』『華嚴大疏』の版下とも同筆であることが知られる。このように『心要洞玄記』の書写を始めとして、広く内外典にわたり書写するとともに版下にまで及んでいること、またこれらの手沢者が智照・湛睿・崇順・立心等多彩に亘っていることから、『心要洞玄記』の書写に当ったものは、あるいは書写活動という一つの行業を専らにしていたものかも知れない。

著者の智照は禪爾・審乘・良瑜等とともに東大寺凝然の高足であり、また東大寺華嚴を最初に東国に傳來したこと

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

から、日本華嚴教學史上注目しなければならないが、從来その行実等については殆んど知られていない。いま金沢文庫資料を中心に探つてみるとつきのとおりである。

西暦	年	月	日	年令	場所	事項	典拠
一一〇三	建長六年	—	—	一	—	—	—
一一〇三	弘安五年六月廿三日	二九	鎌倉松室	二九	—	—	—
一一〇四	七年十一月一日	三一	高山寺池房	三一	—	—	—
一一〇五	八年正月三日	三二	天王寺施薬院	三二	—	—	—
一一〇六	八年正月三日	三三	天王寺施薬院	三三	—	—	—
一一〇七	五年四月禁足之日	三四	相州華嚴山	三四	—	—	—
一一〇八	正安四年十月三日	四五	都婆印受く	四五	華嚴還源觀疏抄補解并序対証義記開板	華嚴經綱要講義	文殊師利菩薩念誦次第書寫義聞集記校証
一一〇九	嘉元二年九月五日	五一	鎌倉松谷寺	五一	大乘起信論義	識	識
一一一〇	三年三月十一日	五二	最極秘抄書写	五二	静基より大卒	識	識
			寺流灌頂印可祥		都婆印受く	刊記	—
			賴乘より安祥		—	卷六	—

定仙より安祥寺	定仙より西院	流印可受く	受く
静怡より小野	静怡より小野	灌頂受く	灌頂受く
流印信受く	流印信受く	秘密	静怡より秘密
灌頂受く	灌頂受く	勤修	静昭より勤修
寺仁清方傳法	寺仁清方傳法	灌頂・秘密	灌頂・秘密
印信授く	印信授く	小野流	阿に小野流
鉢阿に勸修寺	鉢阿に勸修寺	秘密血	良弘方相承血
良弘方相承血	良弘方相承血	脈授く	脈授く
鉢阿に安祥寺	鉢阿に安祥寺	実嚴方印信授	鉢阿に安祥寺
実嚴方印信授	実嚴方印信授	頂血脈授く	頂血脈授く
印可接く	印可接く	灌頂受く	阿に灌頂受く
鉢阿に西院流	鉢阿に西院流	法傳法傳	阿に法傳法傳
源阿に安祥寺	源阿に安祥寺	血傳法傳	阿に血傳法傳
実嚴方傳法傳	実嚴方傳法傳	血傳法傳	阿に血傳法傳

(注) 典拠の数字は金沢文庫古文書番号、識を冠したものは同じく金沢文庫古文書識語篇の番号である。

智照の出自および没年については資料がなく明らかでないが、前掲の行実一覧により高山寺（京都）・四天王寺（大阪）・金沢称名寺・相州華嚴山・鎌倉松谷寺等を拠点として『心要洞玄記』『演義鈔外典抄』（仮題）の撰述、『華嚴經綱要』の講義、『大乘起信論義記』の開板、『華嚴信種義聞集記』『華嚴還源觀疏抄補解并序』『華嚴遊心法界記』の校証・対校・加点、さらには『清涼忌祭文』を撰する等華嚴教学の育成発展に努力していることが知られるが、特に称名寺住僧中、外典にもつとも造詣の深かつた円種⁽⁴⁾と親交を結んだことが、やがては『演義抄外典抄』『心要洞玄記』の撰述、さらには『華嚴還源觀疏抄補解并序』および『華嚴遊心法界記』等の校合・加点に直結し、後世湛睿を中心として繁栄をみた東国華嚴教学の基礎を確立したことは注目しなければならない。

また智照は鎌倉極楽寺、金沢称名寺、鎌倉西方寺・正法藏寺等を中心に静基・頼乗・静怡・定仙・静昭等から安祥寺流実嚴方・親嚴方、勸修寺流良弘方・小野靜晉方・仁濟方、三宝院流、西院流等を相承するとともに、これらを秀

範・釤阿・源阿等に授与し、鎌倉における東密の発展に寄与している。

また智照には『華嚴經綱要』『華嚴信種義聞集記』『華嚴遊心法界記』『華嚴經感應傳』『華嚴還源觀并原人論』『華嚴還源觀疏抄補解并序』『華嚴經略策』『三部華嚴等對當付八会』『大乘起信論別記』『金剛般若經疏論纂要』『成唯識論卷第十聞書』『文殊師利菩薩念誦次第』『仙芥集』『最極秘抄』『光明真言土沙加持』等の手沢本があるが、これによつても華嚴・東密の学匠として一方の雄であったことが知られる。しかし智照の思想的特色については著書が少くないばかりか、いずれも註釈書であることから明確には知ることができない。ただその行実あるいは手沢本等から東大寺戒壇院系の華嚴を中心として高山寺華嚴の影響もかなり受けっていたことが知られる。また奥書からも知られるように澄觀の『心要』を特に重視していることは、あるいは高山寺証定と同じく教禪一致思想に立つていたかも知れない。

最後に智照が本書を撰述した理由および経緯、さらには註釈の様式等について考察してみたい。まず本書撰述の理由等についてはその奥書に「文麗義深、言簡旨廣、探蹟索

隱、原始要終、莫大乎斬書者乎、智照山中行學余閑、講閱味斯文義、且教誨學徒、如水無津涯、故纂輯己所見、綴叙一卷」とあることから十分伺い知ることができる。これにより智照は單に関心を抱いたに止まらず、自らその余暇に研究し、学徒にも講義をしていたことが知られるが、その背景にはいくつかの要因があることを無視することはできない。その第一は日本の華嚴教学において『心要』の地位が非常に高かつたことである。これについては前に触れた凝然の『法界義鏡』によつても十分知られるが、さらに高山寺明惠の門流で教禪一致を挙揚した証定も、その著『禪宗綱目』第三顕見性成仏の中に「心要云、無住心体靈知不昧云々」⁽⁴⁾として『心要』の引文により見性成仏を明かし、また凝然・禪爾の高足で鎌倉を中心とする東国華嚴教学を確立した湛睿も、その著『五教章上巻纂釈』第二「十佛自境界事」の中に「心要云、眞妄物我、舉一全收、心佛衆生渾然齊致」⁽⁵⁾と援用していることからも知られる。また金沢文庫資料中に『心要』一部(金沢称名寺常住本と頼成手沢本)科文一部(融玄手沢本)が所蔵されていることもこれを明証するものと云えよう。また第二には日宋交通を因由とした彼我禪僧による宋朝禪の流入、さらにはそれに基づく鎌

倉を中心とした仏教諸宗における禅の受容を無視することはできない。金沢文庫資料『小経蔵目録』には『大惠錄』『正法眼蔵』をはじめとして四十五種の禅籍が収められており、⁽¹⁶⁾ 律院金沢称名寺における禅の受容が如何に積極的であつたかが知られるが、このような動向が智照をして『心要』に大きな関心を抱かしめ、やがては『心要洞玄記』の撰述へと展開したものと思われる。それは註釈にあたり『大慧普覺禪師書』『正法眼蔵』さらには『靈源筆語』等を引文していることからも推察することができる。

つぎに註釈の様式等について述べると、註釈は逐語的で著しく詳細にわたっているが、その様式は經論および外典を極めて正確に且つ縦横に引文する傳統的な註釈方法をとっている。主な引用文献は華嚴では澄觀・宗密関係を中心として、法藏および二水四家の子璿・淨源・觀復・師復・師会関係、禪では『大慧普覺禪師書』『正法眼蔵』『靈源筆語』『宗鏡錄』『注心賦』が注目され、その他では僧肇の『寶藏論』『肇論』、元康の『肇論疏』、志福の『釈摩訶衍論慈行鈔』等を挙げることができる。また『文選』をはじめとする外典類の引用も戯文を中心に数多く行なわれているが、これについては奥書により儒士円種にその校勘

を依頼し正確を期していることがわかる。しかし經論等の引用による傳統的な註釈方法をとっているため、『心要』本来の思想を解明するより、必要以上の字義の詮索に終始しているのは止むを得ないものとしなければならない。

以上智照の行実を中心に『心要洞玄記』成立の背景を考察し、あわせて註釈の様式等について簡単に触れたが、『心要洞玄記』は『心要』の本格的註釈書として唯一のもので、澄觀における禪思想の理解は云うまでもなく、禪教一致思想さらには仏教諸宗における禅の受容を解明する資料としても非常に貴重である。

〔附記〕

『心要洞玄記』の調査および活字掲載を御許可頂きました
前田育徳会尊經閣文庫當局に対し厚く御礼申し上げます。

- (1) 『明和本戒壇院凝然所述書目録』及び『戒壇院國師凝然撰集』(諸宗章疏錄卷三所收)に『心要義鑑於宇州久米郡
要科文前本』『同後本』とあり、凝然に『心要』の注釈書及び科文があつたことが知られるが、如何なるものであつたか不明であるから、ここでは省略する。
- (2) 大正五〇・七三七・中参照。
- (3) 鎌田茂雄氏「中國華嚴思想史の研究」二一四頁参照。

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

- (4) 大正五一・四五九・中参照。
- (5) 正統二・一六・一・二八左下参照。
- (6) 日仏全一三・二八一・下参照。
- (7) 日仏全一三・二八二・上参照。
- (8) 日仏全一三・二八九・上一下参照。
- (9) 一部は紙背を再利用し書き改めているから、改作以前の内容が知られる。
- (10) 智照から湛睿に傳領されたものは『華嚴遊心法界記』『修華嚴奧旨妄尽還源觀并原人論』『華嚴還源觀疏抄補解并序』『大乘起信論別記』『金剛般若經疏論纂要』『華嚴經感應伝』『華嚴信種義聞集記』等がある。
- (11) 従来『起信論義記』『華嚴經探玄記』『華嚴演義鈔』『華嚴大疏』等はいずれも東大寺版とされているが、版下の書体から鎌倉版としなければならない。
- (12) 智照の行実から断定はできないが松谷寺と正法藏寺は同一と思われる。
- (13) 抽稿「東国佛教における外典の受容と研究」（金沢文庫研究紀要第十三号所収）参照。

- (14) 日本思想大系（岩波書店）一五・三九四頁上参照。
- (15) 日仏全一一・一二・下参照。
- (16) 金沢文庫古文書五八三二号参照。

(17) 大惠宗杲は日本禪林に大きな影響を与えており、金沢文庫資料中にも大惠関係が含まれているから、その引文も当然であるが、「靈源筆語」の引文は注目しなければならない。「靈源筆語」の著者靈源惟清は、黃龍慧南—晦堂祖心—靈源惟清—長靈守卓—育王介謐—萬年曇費—天童從璫—虛庵懷敞—明庵榮西と系譜し、黃龍派に所属するが、黃龍派は鎌倉寿福寺・世良田長樂寺を拠点に榮西およびその門流を中心繁栄をみたので、あるいはその関係から「靈源筆語」が鎌倉において流布していたものと思われる。

(追記)

鎌倉青蓮寺資料中に智照手写本『毗盧遮那頓証菩提法』『七重大事』『秘護身法』を発見したが、これらにより、智照が正安三年十二月廿日、某（定仙か）より七重大事を受け、嘉元四年

四月七日、頼乗に秘護身法を授けていることがわかった。

凡例

一、翻字にあたっては改行・挿入等も原文通りとし、できるだけ資料に忠実に活字化することを基本とした。しかし欄外等にあり印刷不可能な部分は（注）を附し末尾においた。

一、虫損等により不明の文字は、その字数に応じて□□または〔 〕、一旦書寫した文字を抹消してある箇所は■をもつて示すが、訂正字がある場合は原文に即して傍記した。また抹消された字が判読できる場合は■の右（訂正字が右に傍記してある場合は左）に括弧して傍註した。

（帙）

心要洞玄記

湛睿

（原寸
30×11・5
cm）

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

一、智照の補訂により書き改めた部分は『』に入れ区別した。

一、異体字は可能な限り原文通りにした。

一、古様の仮名は通常の仮名に改めた。また訓点は二回にわたり附されているが、組判の都合で区別しなかつた。なお書改められた部分には殆んど訓点はないが、便宜上紙背にある改作以前のものにより附した。

一、句読点・返点・連続符・声点・文中に施してある傍線はできるだけ原文通りとした。

一、印刷の都合で角書が原文通り組めなかつた所がある。

一、筆者が私に校訂した部分は〔 〕を附し傍註した。

（端書）洞玄記

荅二皇太子所問一ノ心要ヲ牋

荅者對也、皇太子者・白虎通曰・皇美也、漢官儀曰・皇大也、運斗樞曰・皇者中也、元命包曰・皇者煌也、太子嫡嗣稱皇太子、諸侯王之嫡・稱世子、後代咸因之云云。今言二皇太子者・正指下唐順宗皇帝・為中德宗之太子上也、案三唐書本紀・諱誦・德宗長子・大曆十四年十一月乙卯立為二皇太子、云云貞元十一年・時年三十五、致此問一也、所問者・君子疑思・問・問以辨之、故以二令一書・問レ疑、心一要者・正荅問之書名・或云三指三所問法一非也、行願鈔・拾遺問・并云下荅二順宗皇帝所問二心要上・傳燈錄云・鎮國大師澄觀・荅二皇太子問二心要云云・名為二心要之義・具見二正文釋二、牋者・說文云・表識書也、文心雕龍曰・牋者表也、唐書志云・下之達上・其制有六・其三曰牋、云云今牋主・表二明心法之要一・達二皇太子一・令三識二・別其義一・故用牋也

清冷山大華嚴寺沙門澄觀奉

清冷山者・岱州鴈門郡五臺是也、華嚴大疏曰・以下歲積堅冰・夏凝三飛雪・曾無炎暑・故曰清冷、五峯聳出・頂无林木・有三如二疊土之臺・故曰五臺、云云山中有寺・即名清涼・涼冷字異義同、音亦相近、故通用之、大華嚴寺者・案二會解記・彼山中有三大孚靈鷲寺・後改三大華園寺、至則天時・亦改為三大華嚴寺、沙門者・名沙門、故隋書志曰・沙門譯曰息心、云云或翻勤息、梵音、具云沙勇拏、大灌頂經曰・息レ心達三本源・是故亦翻勤行、又或云沙門華言・所謂沙汰之門也、古人多不取之、澄觀者・牋主名諱・俗姓夏侯・越州會稽人也、唐開元二十六年生・九歲入學、十一得度、六十二德宗賜号清涼國師、至開成四年・或云三年者非也、三月六日卒、壽一百二、臘八十三、此是據妙覺塔記、與三大宋高僧傳不同、奉者・說文曰・承也、言奉二承皇子令也

澄觀誠惶誠恐

書儀格法・先標三己名、次舉三惶恐之礼、其例出在三文

選任彦升表・沈約奏等・
中使蘇明俊至

文選張銑注曰・天子私使曰中使、云々蘇即姓也、
明俊其字、圓覺經疏鈔曰・順宗在東宮時・勅使蘇
明俊・至清涼山・問和尚諸經了義、和尚製述・
以三藏引而答之、云々至者・來至清涼山也
伏奉傳令再索心要

拜伏而奉承中使所傳之令也、傳或作傳、太子子官
員雖有傳・不得掌レ 令・故作傳不允、唐
書志曰・上之逮下・其制有六、其四曰・令、皇太子用之、
又曰・左贊善大夫五人・正五品上・掌傳令諷失、
云々再索者・重求也、再索之言・出易說卦一、心要・准
上湏知、
仰承嚴令喜懼無任

說文曰・仰舉也、詩曰・高山仰止、云々瞻仰而奉承皇
太子尊嚴之令也、廣韻曰・嚴毅也威也敬也、喜懼者
文選陸士衡表曰・喜懼參并、劉良注曰・懼不勝
任也、任者堪也勝也、文選下彬啓曰・不任悲荷之

至、李令伯表曰・不勝犬馬怖懼之情、云々皆以
不堪為義

伏惟皇太子殿下

伏義如上、文選楊子幼報孫會宗書曰・伏惟聖主、
注曰・惟思也、宋謝庄慶太子元服上至尊表曰・伏惟
皇太子殿下、云々言殿下一者・太子尊故不直接、
呼在殿者而告之也

明助天高

案孝經孔氏傳云・有三不蔽道・故曰明、又老子曰・見

小曰明、又尚書堯有三欽明、舜有三文明、是知明是
聖人之一德也、助者韻曰・佐也益也、春秋傳曰・天

高聰卑、云々說苑・子貢曰・今謂大高・無少長賢愚皆知、仲尼之賢猶天之高也云々言太子
明德・佐助上天高明之德也、或曰・天即帝也、太子
有三明兩之義、天子比上帝之德、太子資忠孝至明之
功、以助益皇帝高大之德也、此義亦得、

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

量深三海闊

量者度也、即分一齊也、猶言三器量測量之類也、深者、玉篇曰、邃也遠也、海者、衆水所會、其言晦也、列子曰、天下之水莫大於海、此過三江河之流、不可為三量數、云々濶即闊字、廣也遠也、以二太子測量比三溟、海廣闊意在三其深如三海濶也、或取下太子智量幽深、超中於海闊上也、又量即分量、寄海深廣而喻、此文深即約堅、闊即約橫、故似比量不類、

今以三智量之堅深、况三溟、海之橫闊、義亦不錯、

豈獨不遺微細

豈者、安也焉也曾也、獨单也、与特字音義通、莊子曰、豈獨于國哉、云々不遺者、不遺忘也、孝經云、不敢遺小國之臣、云々又訓、遺為棄、義理相通、微細者卑賤底、劣之義也、史記曰、高祖起微細、撥亂世、云々今賤主自謙而稱實以導引釋教之流

實者寔也、證其不虛導引者、案瀨鄉記・仙法三

十六中、其二曰、或以導引、飭仰、神云、今取教導誘引之義、釋教者、釋則學能說之人、教則指所說之法、能所相合、即云三釋教、猶言三釋氏之教法也、沙門智昇撰釋教錄、又唐高祖詔曰、釋教後興云々之流者、約此流字、其義有二、流者、類也輩也、一別指皇太子為流、猶下曰、中導三引佛法之輩列上也、二通釋門諸衆、指之為流、猶四云三導三利引揚佛法輩類也、前解為允

乃護法菩薩之用心也

乃者、語辭也、護者護持為義、內致愛養、外禦侵害、大集經、有護法品、廣說其事、又涅槃經、菩薩成就十法、其八曰、護法、護法者、所謂愛染正法、常樂演說讀誦書寫、思惟其義、廣宣敷揚、令其流布、若見下有夫人、書寫解說、讀誦讚嘆、思惟義者、為求資生、而供養之、所謂衣服飲食臥具醫藥、為護法故、不惜身命、是名護法、云々菩薩者、梵音略語、舊翻、大道心衆生、新譯云、竟有情、此引護持正法之大士、而例皇太子也、用心者、文出論語、又孫思邈

云・求ニ民之瘼一・恤ニ民之隱一・賢一人之用・心云々此一
句・廣結ニ上歎一德一

但理深智遠

但者徒也、簡別之言、理是法性真理、智是般若靈鑑、
佛道論衡曰、理深語大、又法華云・如來知見廣大深遠、
又魏靖曰・理明則言廢・智會則觀亡、云々今舉普賢理跡・
文殊智用・深廣幽遠・而歎之也

而識昧情疎

而猶然也、識知也・了別為眞、而昧暗也・不明為義、
猶云三識・慮暗・昧也、情者性之欲也、寶藏論曰・心必有
情・云々疎者不密也、猶云三情・量疎・闊也、皆謙己之
詞

書不盡言・言不盡意・意不盡理・
周易曰・書不盡言・言不盡意、然則聖人之意・其不
可見乎云々莊子注曰・求之於言意之表・而後至焉云々
以簡必詣
誠曰ニレ才難一

簡略也、必審也、詣至也、曰雖也、難不易也、言言本

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

不得盡意・故因簡略之言一・得
意一誠是雖二才情之人一・所為難也、禮記曰・大禮者必
簡、論語曰・居簡行簡、周易大畜九三爻辭曰・良馬逐
貞貞・曰・閑二輿一衛・利有攸往・王輔嗣注曰・以雖訓
曰也、才難者・論語曰・子曰才難、孔安國注曰・大才難
得云々此難一一字・義有兩端一、事繁略之

瞻望离宮以竭愚思

瞻視也、望看也、毛詩曰・瞻望不不及、离宮者・离是卦名、
易曰・明兩作離云々太子・有明兩之義一、故曰離宮、
宋謝荘慶太子元服表曰・皇太子殿下・明兩承乾、又周
王褒請立太子表曰・明兩作離・少陽纂三重・暉之業、
云々火珠林・有離宮文、八卦各稱離宮、宮即宮一室、
猶稱離家也、离或作離、離亦有別分之義、文選曰・
離一宮別一館云々今前義為允、竭盡也、愚思者・愚是憲
憲無知之貞、思念也、魏人陳仲儒・對二有司一
曰・遂竭愚思一鑽研甚久・云々牋主謙己而言・思字去

伏垂玄鑑一體一察 菊莞一聲

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

此牋文中・伏字有レ三、今之伏字・与前二異、前是自謙之義、今正勸ニ太子ニ、興レ俯義同、玄鑒者・還源觀曰・玄鑒絕レ。分云々玄即幽深之兒、鑒即明臨之義、體察者・卦是親合之義、察是深推之意、薦蕡者・毛詩曰・詢于薦蕡一、傳曰・薪采者、釋文云・蕡草薪也、言四夫四婦采薪者云々牋主・以己謙比三薦蕡一無任惶恐謹奉白牋一

無任惶恐義共見レ上、白牋者・文選任彦升牋曰・奉白牋一、白有三義、一色名、二啓一言、三明一揭之義也、今取二啓言之義一

兼錄所答如左

兼錄猶并記也、上已以レ牋薦明因由、下當下以レ文答申示所問也、故云兼錄、如レ左者・凡披レ文・先為レ右、後為レ左、即隨二人左右而稱、王文憲集序曰・集錄如レ左云々

謹牋

此二字正勿結、最居一牋之末、全以通ニ收上事一

貞元十一年五月十一日

貞元者・唐德宗年号也、即位六年乙丑・即興元二年也、其正月丁酉大赦改元貞元、其十一年則即位第十六年也、時順宗立坊・已十七年也、其五月十一日丁丑日也

據唐史・足可驗考

清冷山大華嚴寺沙門澄觀

義釋准レ上須レ知、始載之者・為下奉ニ承太子恩問而對答上、此再出者・為上レ牋書儀而記之、上來釋牋文竟、後欲釋本文・大分為三、初明本有、二明修生、三明本修無二、初明本有、亦分為三、初推道源、二顯心軀、三弁勝德、今初也、

『至道本乎其心

至道者至真也極也道物之所由也又人之所蹈也孝經述義釋至德要道曰至謂至彼極處故達妙為至乃至至以極遠為稱又云道猶道路也出行必尊於道離道則無所適道者足之所踐之物也足之所涉既謂之道所表之亦稱道焉道者行所依之路也万物所由皆稱為道行不由道物皆不遂已上太素經楊上善注曰至道者至理也云々古德云至妙靈通曰道已上至道之言通内外教梵網云孝順至道之法云々莊子云黃帝遇廣成子

問至道廣成子曰至道之精窈冥冥至道之極昏昏默默又孔子問於老聃曰今日安間敢問至道成玄英疏云詢問玄道也札記曰雖有至道弗學不知其善云云今假内外教玄極之言直為大乘心法之名也問二教至道其軀有淺深耶答亦也外教至道本乎一氣內教至道本平一心本乎其心者謂以一心法界是方法之本生佛之源故牋主曰法界者一切衆生身心之本軀云云又云大哉眞界万法資始云云此明情与非情一切諸法皆依此心若離眞心無別有法故二顯心軀二初推心无二顯軀性今初也』

心法本乎無住

長水金剛經記云謂一法界心・本来無住・本来空寂・云云玉峯師會云・良由是真如一心・与生滅合名繫耶・變一起根身器界・色等諸法・推之無軀歸於真心之空・則第一義空・為諸法之本源・云云無住之言・出於淨名經・華嚴演義鈔云・即淨名第二・推善不善之本・故經云・善不善・孰為本・答曰・身為本・又問・身孰為本・答曰・欲貪為本・又問・欲貪孰為本・答曰・虛妄分別為本・又問・虛妄分別・孰為本・答曰・顛倒想為本・又問・顛倒想・孰為本・答曰・無住為本・又問・無住・孰為本・答曰・無住

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

則無本・文殊師利・從無住本・立一切法・觀公釋曰・無住即是實相異名・實相即是性空異名・故從無性・有一切法・云云二顯軀性

無住心軀靈知不昧性相寂然

正顯心軀・先問・真心既無住空寂・未審・何者是此真心・真心自軀・有何勝用・云・何表顯・既云的有二真心・豈唯言無住・可不出其軀相哉・故云靈知不昧等・問・其相云何・答・圓覺鈔・況心寂而知・云寂是知寂・知是寂知・寂是知之自性軀・知是寂之自性用・故清涼大師・答順宗皇帝・心要云・靈知不昧・性相寂然・云々若分字・況者靈者・覺鈔云・若但云明・未簡日月之類・故云靈也・云々知者・華嚴大疏云・知即心軀・通於染淨・然此真心・有二種用・一自性用・二隨緣用・今言知者・即自性用・不待緣・本自知故・云々演義云・今則直語下靈知之心・異乎木石・通於能所證上云々圓覺鈔云・眞知者・一心眞實・本自能知也・謂起信論・明眞如自軀相云・從本已來・性自滿足・一切功德・所謂自軀有大智慧光明義・故眞實識知義故・云々不昧者・普水淨源云・華嚴十廻向品云・

眞如・照明・為性・故云不昧・云々今此靈知・即是禪宗之本源也、故圭山云・即此空寂之知・是前達磨所傳清淨心也。云々近世靈源禪師云・此宗旨號正法眼藏涅槃妙心者・乃聖凡共有之靈知也。云々自二達磨西來・以六代密傳心印・至荷澤時・恐宗旨滅絶・明言知之一字衆妙門・故宗鏡錄云・達磨所傳妙心・不出知之一字・云々宗專於詞教勸離毀相泯心但辯心性靈知・未顯本有德相業用・故祖師云・南北宗禪不出頓教也、然此寂知・隨地位・名義稍殊・故圭山云・約了悟時・名為理智・理即是寂智即是知・約發心終時・名為止觀・止息龐緣・契於寂・觀照性圓滿・成佛之時・名為菩提涅槃・當知始自發心・乃至畢竟・唯寂唯知・云々性相寂然者・長水云・然此一心・有性・有相・則凡聖・迷悟・因果・染淨等異・性則靈・不レ昧・了・常知・然此性相・不即不離・云々晋水云・性相兩亡・唯一真界・故前序云・泯性相・而歸法界・云々行願鈔云・攝性相・全因真性・乃至如鏡攝影及空・全同眞也・云々三顯勝德為四・初德用圓備・二表遮具足・三財用

眞常・四取捨難量・今初也
包含德用該攝内外

包含言明三體性含於相用・即一切法・富有万徳・靡二所不包・故覺鈔云・然此含者・謂即身之用・依即用之身・即用之身・持於即身之用・非レ如檀等盛貯餘物・此乃如金舍器之喻・謂純一之金・含於万器・緣會即顯・云演義云・清淨法界・杳杳冥冥・以為能含・恒沙性徳・微妙相大・以為所含・相依性・性無不包・故稱為含・性身無外・相徳有名・有名之數・不能遍无外之身・故云々徳用者、演義云・徳用者即徳相業用、云々圓竟鈔云・徳即相大・用即用大・乃至然此徳用・盡收色心・境智・時處・教義・行位・一切諸法・不レ同論中翻三對妄染本空・但顯三自性之徳・云々該攝内外者・或約心境・為内外・或約依正・為内外・皆以一真法界・為能攝・以心境依正・為所攝也・問・何以得知心身具如是徳・答・賢首大師云・若此眞身無徳者・證此不應具徳・既證徳已・万徳圓滿・即驗眞如・具恒河徳也・二表遮具足

能深能廣非有非無

『初句表心，躰用深廣。能深者明心之体性堅第三際而洞然无底。故經云甚深法性諸佛行處能廣者顯心之德相擴遍十方而曠然无邊。故經云覺遍十方界本性圓滿故大疏云即用而真故甚深用無涯畔故廣大云云。次句遮顯真心離二邊一道行般若云心亦不有亦不無云云。大疏云欲言其有一同如一絕相一欲言其無一幽靈不竭云云。長水云空有二法相對立名一有之與空一俱是相若墮一相非是常心云云又非有者遮法相宗一切唯識一非無者遮無相宗心境俱空一此乃偏執有無一故未免斷常一故若合二宗即真之有是法相宗即有之真是無相宗兩宗不相離一方成無尋真心矣三躰用真常』

不生不滅無終無始
不生不滅者、起信論云、所謂心性不生不滅、云々演義云、迷悟生滅來住、紛然眞界湛若虛空一、躰無生滅一、云々圓覺鈔云、不生不滅者、真心不變故不生滅一、云々長水云、即真心本不生滅一、德相業用量過塵沙一、日用不知如レ狂如醉、若貧女宅中寶藏、窮子衣內明珠、雖有如無一柱受艱苦一、云々無終無始者、密嚴經云、如來清淨藏、亦名無垢智一、常住無始終一、離四句言說一、云々演義云、謂或說

眞性無レ始無レ終・性無生滅故・恒沙性徳・依レ躰説レ相・亦無始終一、云々此二句則・次第轉釈・長水云・此則覆釈前來相非生滅一、以非生故無始一、非滅故無終一、云々三取捨難量

求之而不得棄之而不離

此明三靈知一心・天眞本然・更非三所可求索棄厭一也、初ノ句意出文殊般若經、彼經云・佛告文殊・汝於佛法一豈不趣一求一、文殊言・世尊・我今不レ見レ有下法非二佛法二者上、何所趣一求、云々起信論云・以心無形相一・十方求レ之・終不可得・云々賢首大師云、淨德性滿・無レ假外求一・云々又・維摩經曰、菩提者・不可以レ心得一、不可以レ身得一、云々次句意出思益經一、演義云・即彼經第一・時有五百比丘一、聞レ説レ法・從レ座去等・乃至綱明菩薩・令思益梵天一・為作方便一・云々梵天言・善男子・縱使令去至恒河沙劫一・不能得出如意是法門一、譬如癡人畏於虛空一而走・在所至處一不離虛空一、此諸比丘亦復如是、雖復遠去一不出空相一、不出無相相一、不出無作相一、云々圓覺鈔云、經既云・如幻者亦復遠離一、即明非幻者不可レ離也、故清涼云、棄レ之而不レ離、

云々外教之中・礼記云・道也者・不可須臾離^{モレ}、可レ離非道也、云々義或類同、圓覺鈔云、知者謂躰自知覺・照照不昧・棄レ之不レ得・取レ之不レ得^(注3)。云々。二明修生二、初明信解、二明修證、^(三從修入證)初明信解・亦分為三、初拳迷悟因、二會通伏難、三正明信解、今初也

迷現量惑苦紛然悟真性空明廓徹

迷之与悟者、略策曰・迷因無明・橫起似執東為西・悟稱眞理而生・如東本不易、云々謂愚夫・不了唯心現量・一起造惑業・輪廻生死・今悟心靈知・達性無住・寂照雙流・佛果現前・言現量者、楞伽經云・如愚不了繩、妄取以為蛇・不了自心現・妄分別外境・云々貞元疏云、自心現量者・不レ同三量現量也、謂不レ了万境皆自心現・如心分量・云々海東慈行云、現量境界者・現今分別量度之心・所緣境界、非彼三量中・現量心也云々惑苦紛然者、惑者煩惱・覺鈔云・惑即煩惱、謂貪瞋癡等・根隨煩惱、云々苦者苦果也、大疏云・逼迫名苦・即有漏色心云々紛然者・交亂貌也、眞性者・長水云・眞謂揀非偽妄一・獨順圓成一・性謂自躰常住・不變不異・即揀諸法空性一・云々禪源詮云・靈知之

心・即是眞性云々空明廓徹者、大疏云・如外無智一・々躰即如、此二猶空・寂照無尋、云々演義云・如外無智一、即以如一攝智一、々躰即如、是以智一攝如一・合為一味一、乃至如日合レ空、雖レ有一事一・一相難レ分、云々行願鈔云、廓謂空廊、徹者交徹、云々二會通伏難

雖即心即佛唯證者方知

『雖者縱奪之言承上發下今為會通伏難一而言也恐有難言既言心性靈知不昧一明知衆生即本来有佛智故演義云佛者是覺人有靈知之覺一今第一義與之為性一故名佛性云云然今那亦謂有迷悟耶故今通謂前言靈知一者不是證知一意說眞性不同虛空木石一故云知也此空寂之知即與諸佛一分毫不殊一但以顛倒一故不證知一故今頓信本有二增修万行一輪廻夢覺智惠花開如是之時方稱覺者一以是義一故雖之言生唯證方知者也當知雖有本覺靈知一必須始覺佛智方得證知一故演義云雖有此性一若無觀智一不能成果一今由觀智一令彼成果一云々三正明信解為二初片偏解次明眞解初片偏解二初片偏有後片偏空今初也

然有證有知則慧日沈沒於有地

然者覺苑師云蹠前起後之詞有證有知者准禪源序一此當法

相教及北宗禪之見也即禪源出說相教二云依此二空之智二修唯識觀及六度四攝等行一漸漸_二伏斷煩惱所知二障_二證二空所顯真如一十地圓滿轉八識一成四智菩提一真如障盡成法性身大涅槃一解深密等數十本經瑜伽唯識數百卷論所說之理不出此也乃至將識一破境一與禪門息妄修心宗一而相符會云云

智覺禪師心賦曰說證一說知一背天眞_二而永沈有海_一注云若於

真心一執有修一有證一則背天眞之佛一故云云則者廣雅曰則即也慧日与有地法喻文學謂真空妙惠明如日照故曰慧日也有所得心堅實似地故曰有地也沈沒猶如淪溺矣後片偏空

若無照無悟則昏雲掩蔽於空門

若者尙雅疏云不定之言無照無悟者准禪源詮一此亦當三論宗及牛頭洪州之見一禪源亦出破相教云無智亦無得無業無報無修無證乃至諸部般若千餘卷經及中百門等三論及廣百論等皆說此也此教與禪門泯絕無寄宗全同云云心賦又云無照無悟失圓修而常鎖空門注曰若執無修無照失圓修云云長水云真性明了教理俱成何言無照云云圭山云三觀一一首標悟淨圓覺云云何言無悟一昏雲空門法喻並學謂莽蕩空見覆真空理一如雲翳碧空一也真空之理衆聖通入故曰門也上来二見若配圓竟經一喻一者有證有知即當金鑛喻一無照無悟即當

空華喻一覺鈔云空華喻頓悟本無煩惱一金鑛喻漸斷或習一若但用前喻即撥迷悟因果之相便成邪見若但用此喻即似衆生本覺本來不淨失真常理亦成邪見故說二喻云云准此應知離成二見永墮邪路合而雙修方成真解故祖師云離之則兩傷合之雙羨斯之謂也二明真解二初解心性一解妄本初解心性亦分為二初尋思觀一如實觀今初也

若一念不生前後際斷照軀獨立物我皆如

凡此四句對明圓竟經淨業章意也彼經云如湯消冰一無別有水_二云云疏云謂水凍成冰_一還煎水_一以消之_二冰湯俱盡濕性獨存以唯心迷成我一還悟心以消之我智俱盡照軀獨立云云鈔云照軀獨立者是生公語清涼大師心要亦云一念不生前後際斷照軀獨立物我皆如將此四句對詳前文始終相當故略取一句若據文字初後敵對即合云水凍成冰水銷水在心迷成我我盡心在云云一念不生者長水云念生既凡夫相現性隱不生真名為佛一性顯_二相亡_一是故剎那登妙覺等佛於一朝故觀師云一念不生等云云前後際斷者長水云論云非前際生非後際滅云云又云際時限也云云間前後際斷時心歸斷滅否苔長水云然雖能所兩亡不成斷滅一以靈源真心本無能所妄生能所即是乖真一能所既除即合本軀一盡然不昧物我皆如云云物我者肇論云物我同根是非一氣云云同疏云物是外物我是已身

云々問何以得知此明信解真正答慈行云夫欲運心修行正先湏信解真正信解不正所修一切皆邪乃至一念不生前後際断名為真正云々。^(注4)二如實觀』

直至心源無智無得不取不捨無修無證

圓竟鈔云、直至心源・非定非惠也、由雙非故相即、云々心源者、長水云・心源即無相眞如也、契此理一名無生忍・根本智也、云々竟鈔云・圓竟妙心・是諸法之源也、心即是源・名為心源・亦可心是能斷所斷染淨之心・源即竟性真心・此即是心之源・名為心源・前持業糸、後依主糸、二意皆通・云々無智等者、明所離法・即有三對、一境智能所對、二取捨分別對、三修行證入對也、今初對、般若心經云、無智亦無得、賢首云・彼知空智・亦不可得故云無智・即此所知空理・亦不可得故云無得、云々長水金剛記云・智與理真・心與神會・亡所得之法、無能得之心・云々不取不捨者、二取捨分別對、入佛境界經云、不取不捨・即名正念、云々大般若經云・甚深般若波羅蜜・於法都無・若取若捨・何以故・以一切法皆不可取不可捨、云々無修無證者、○修行證入對、謂頓契無念・万慮都亡・修證

跡絕・故云尔、正法眼藏等錄・皆作無對無修也、問・此之與前・何別乎、答・准起信論・前即當隨順・此即當得入、故慈行・釋隨順云・雖無能所・照昧獨立・而仍動搖・說念二帶相・故異得入・云々釋得入云、即離能所念相、及照昧獨立・帶相念也、非是斷滅同木石云々又云、若能所未亡・名為隨順、若心鏡雙寂・名為得入、云々二觀妄本為二、初所解法、二能解人、今初也然迷悟更依真妄相待

『然者躡前解心性起後觀妄本也若依起信意此上當真如門自下當生滅門謂以此心性雖不生不滅湛然察靜而迷悟相依真妄互融故問悟心性即万行圓備何勞解緣起答大疏云亦有說行而不信圓融之旨非真實解已迷悟更依者略策云迷則全真理離真・無迷・悟則妄本是真非是新有云々真妄相待者演義云依真一起妄・因妄一說真・若無能迷・所迷不立云々玄鏡云謂若無真如將何合妄而成生死以一切法離真無自昧故云々二能解人二初漸機』

若求真去妄猶棄影勞形
二頓機

若體妄即真似處陰影滅

此之一段・法喻文學・皆初法・次喻・初法中・若求等者、長水云・世人皆謂斷盡惑結・然後證真・殊不知・惑本眞・云々後法中・躰妄即眞者、演義云、體謂躰達、云々略策曰、事外求眞・二乘偏眞・即事而眞・菩薩大悟・云々喻中棄影勞形・及處陰影滅者・即莊子意也、○以喻漸頓二機・解了淺深一也、彼云・人有下畏レ影惡レ迹而去之走者上、舉レ足愈數・而迹逾多・走逾疾・而影不離身・自以為尚遲・疾走不休・絕力而死・不知處・『陰以休影處靜以息迹愚亦甚矣』明修證亦二初忽明修證二別示證道初分五初修悟同時二動察自在三四止觀雙運五證教相資初修悟同時亦分為二初頓修】

若無心忘照則方慮都捐

二頓悟

若任運寂知則衆行爰起

圓竟疏云修無心悟任運一時・即通解證云々鈔云・無レ心

於心照・則方累都捐・任運以察知則衆行爰起、今但各取上

句、故一悟一修、云々行願鈔云、忘照有一意、一忘則息万緣為定、照則照眞竟。為慧也、此同古師・說无作

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

戒定慧一、彼云・无妄心一是定、知无妄心一是慧、妄心不起是戒、亦同蜀中金禪師・无憶是戒・无念是定・莫忘是慧ト、今云照者・即彼莫忘是慧、然皆是對治方便・未レ為稱性之修也、二者・照亦都不當レ情・為忘照一也、照尚湏忘・況於識念、然其本性・靈知不レ昧、故非斷滅・即荷澤大師・說空察照・為自性戒定慧之意也、乃至皆万行亡照齊修之意也、亦同起信・性無慳惥・順本性・故・修行檀波羅蜜等、云々方慮皆捐者、肇論之詞・彼作方累・彼疏云・說文・捐弃也言煩累皆弃耳、云々任運察知者、即寂之知也、竟鈔云、即察之照・如理智也、故下說眞如自躰・本有真實識知大智慧等、云々衆行爰起者、竟鈔云・

清涼大師所說・万行並不離心・但能竟了自心現『量畢竟清淨即一念之中万行備足云々二動察自在

放曠任其去住〔三か〕〔權實無礙三脱か〕
三權實雙行亦二初正明雙行二會歸法界今初也
靜鑒竟其源流

放曠者自在兒也略策云問契夫寂理内外並冥何能施為更起大用答聲聞事寂事外求眞動而非寂菩薩躰理即事而眞動而

無動不導常寂故不起滅定而現威儀云云長水金剛記云寂而常用用而常寂是自在義云云文選秋典賦云逍遙乎山川之阿放曠乎人間之世濟曰放曠謂無拘束人世謂在人間而無世事間任其去住者謂以无

默已相違何不失玄微乎答五教止觀云維摩默荅欲表理出言瑞天女盛談欲彰性非言外云云未離等者淨源云靜性亂相俱復歸法界云云四止觀雙運

言止則雙亡知寂論觀則雙照寂知

五證教相資

語證則不可示人說理則非證不了

初二句止之與觀問因行無邊何以偏明止觀乎答略策曰万行雖廣此二獨尊其猶易之乾坤亦似天之日月乃至寂智雙流方成佛果云云演義云即寂之照是菩提因即照之寂是涅槃因寂云云二權實無尋靜鑒者演義云靜者離思量也鑒者證法身也云云廣雅云鑒照也云々大疏云智周鑒而常靜云云演義云即止觀無尋周鑒觀也常靜觀常靜止也惑相皆寂亦權實無尋周鑒權也常靜實也云云問云何無尋耶答玉峯云實智照真雙遮皆止云々後二句中含多義門謂一教證二道二宗說二通三因果二門也即略策中具明義相云佛法雖廣略有二門一者宗通二者說通宗亦名證說亦名教即教說一道宗通示修行說通示未悟尋言契理必以教為筌第五得忘言必在虛心躰極今言果海約證相應可寄言詮皆名因分因則可修可說果則忌

語之與動即是事也默之與靜即是理也演義云動即是事靜即是理一源即无尋法界也云云言玄微者演義云即指前法界多義為幽玄微妙之旨云云會解記云無障尋法界即玄微也問語

尚訖證相應云妄心永訖諸見雲被唯證相應豈開言說云云大

慧禪師書引此文云自證自得處但默默冷燭自知不可說與他人故云々說理則非證不了者此當於說通是教道也演義云若不證而說則生滅心行說實相法云云二別示證道二初約遮結前後約表生後今初也』

是以悟察無察真知無知

是以者、躡上^{トトハ}、離言^{トハ}也、初句明察^{ハス}、故放光云・般若^ハ、無所有^ハ、無生滅相^ハ、次句顯照用無知^ヲ、道行云・般若・無所知^一、無所見^一、云々此明^{ニ下}以察知互奪^ヲ、則能所不^レ上立^セ也、故演義云・如躰性空^{ナルカニ}故・智外無如^一、智躰性空^{ナルカ}故・如外無智^一、云々次約表^{シテニ}生後^ヲ三、初能所歷然^一、二能所無^一、三能所俱泯^一、今初也

以知察不二之一心契空有雙融之中道
寂知真心・前以互奪^一故雙非^{レハ}、此以交徹^一故相即^ス、故圓竟鈔云、若見^寂、即照^{レテ}故非寂^一、照^一即寂^{故非照^一}、々々非寂^{ニシテ}々照雙彰^{レテ}、即契圓竟^一、云々知寂不二之一心者、演義云、謂寂照無一^一、為菩提相^一、猶如明鏡^一、無心為躰^一、鑑照為用^一・合為^{シテルカノト}其相^一、亦即禪宗^一、即躰之用自知^一、即用之躰恒寂^一、知寂不^レ一^一、為心之相^一、云々空有雙融^之、之中道者、演義又云・有^{ハレ}

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

即空之有^一、空是即有之空^一、語空^一必攝有^一、言有^一必攝空^一・故曰互融、云々契者・謂符契、即能所契合也、演義云、如一圓珠^一、々相喻有一^一、徹明喻空^一、圓明喻中^一、三無前後^一、此喻一諦而三諦^一、若以明鏡^一照之^一、珠上三義^一・一時頓現^一、即喻一觀而三觀^一、若就鏡中^一觀珠^一、々之与鏡^一非一^一非異^一、則喻心境^一二而不二^一為真竟^一也云々問綱要立五重證道云云与此同何異乎答望五重雖似有異開合縱奪更非^一差錯^一、彼文初不云^一乎・以初三門^一說有前後^一・躰无二^一故^一依此^一須知^一、二能所無^一

無住無著無攝無取^{〔收か〕}

無住無著者、此則文殊般若意也、大疏云、住平等^一則無能所^一、故曰無住^一、我即法性^一、更不證入^一、法性無性^一、復何所入乃至般若文殊分云・若知我性^一、即知无法^一、若知無法^一、即無境界^一、若無境界^一、即無所依^一、若無所依^一、即無所住^一也、鈔云・我即法性^一、更不證入下・釈上平等則無能^一、所故曰無住^一、然有一^一意^一、一^ハ上^一句明一性不^レ分^一、故无能所^一、猶如一指不能自觸^一、二法性無性^一、復何所入者・明性空^一、无能所入^一、亦如虛空^一不^レ住虛空^一云々無著者、

又文殊般若分云、汝豈不得无著性耶、舅殊答云・我即無著性・豈無著性・復得無著性・云々無攝無收者、攝謂兼屬、收即統納、今亡能所・故無兼攝、絕彼此・故無統收、〔三か〕二能所俱泯二、初不奪俱泯

是非兩亡能所雙絕

二本心頓現

斬絶亦寂則般若現前

是非兩亡者、謂以中為是・邊為非・猶是相待・故湏兩亡
方契心跡、言能所雙絕等者、行願疏云・由智即理・故・
智非智、以全同理無自跡・故・由理即智・故・理非理、
以全同智無自立・故・如波即水動相便虛・水即波故靜相亦
隱・動靜兩亡・性相齊離、云々鈔云泯有二意、一互奪故・
具如疏文・一本心頓現故俱泯、謂本覺心跡自知・不可將知
更知心跡、以照跡獨立・故乃至疏文喻中・正喻互奪一・亦
合後義、水之動靜兩亡・即能所互奪・是前義也、而涅跡
顯現・不屬動靜・即為泯也、靈知本覺顯現・不屬理智・
亦尔云云言般若現前者、玉峯云・諸祖皆曰、一邊既離・中
道不存、心境兩亡・亡絕亦絕・般若現前・已當八部無相大

乘之極致・鎮國曰・即同智照無二相・亦同頓教云云問・言般若現前者・般若是智・智有多途・故或自知智、或无知智、及无緣真智等、淺深重重、今言現前・是為何智乎、答・智之為言・雖有淺深之異・皆以照了為義・今之所言・少異此義、何者・演義云・若以知・知寂・非是无緣知・如手執如意・非无如意・手・若知自知・知・亦非无緣知・如手作於拳・非是不拳・手・知雖不・知寂・亦不自知知・不可謂无知・以性了然・故・不同於木石・如手不執物・亦不作於拳・不可謂无手・以手安然・故・不同於木石・斬為禪宗之妙・故今用之一・而復小異、以彼但顯無緣真智・以為真道・若奪之者・但顯本心不隨妄心・未有智慧照了心源・故云・故湏能所平等・等不失照・為无知之知・此知知於空寂无生如來藏性・方為妙耳、〔本修か〕云云第三修本無三、初始竟歸本、二明究竟覺三證入果海、初始竟歸本亦分為三、初本有修生二修生本有、三本修一跡、今初也

般若非心外新生智性乃本来具足

初句、大疏云、竟心性相、即是佛竟、非外來、全同所

竟一、故理智不殊一、唯一圓竟、云云次句・華嚴經云・佛子・
如來智惠・無處不至一、何以故・無一衆生・而不具有如來智
慧、云云演義云、以下無漏智性・本自具足・本有真實識知
・遍照法界一義上故云云二修生本有

然本寂不能自現實由般若之功

〔第か〕

演義云、明知一切衆生・雖有弟一義空智惠之性一、若無般
若等為^{ヲタル}了因一、終不成佛一、云云綱要云、衆生性具、

萬德本圓、但為惑一障故・湏開示一、猶琢真璞一、方成寶
器一、云云三修本一軀二、初明互相成

般若之与智性翻覆相成

二正明一軀

本智之与始修實無兩軀

初一句・明三本覺隨^テ緣一、生於始覺一、故此始覺、是本竟
所^レ成也、還待此始竟一、方名本竟一、故本竟亦為始覺所^ニ
成一也。故綱要云、修成即本有。如鑄金一成像一像不異金一
故、本有即修成・以離金一無^レ像一金全作像一故、始是交徹^{〔如か〕シテ}・
自在無^レ、云云後一句、正明始本一軀、本来究竟矣^{スルコトヲ}、
本智者、大疏云、本竟為根本智一、以与始竟一為根本二故、

金沢文庫本『心要洞玄記』について（納富）

云云圓竟鈔云、即始覺同本一之時・無別始覺之異一、故華
嚴宗說・新成舊佛、舊佛新成、成時但是本本之眞一、不見
新新之相一、悟修皆尔、故華嚴說成。時必與一切衆生一、
同軀俱成、云云又云・成與不成無差別者、正由不^レ取新
成之虛相一・云云二明究竟覺三初寂照雙流、二因果圓融、
三結屬迷悟、今初也

雙亡正入則妙覺圓明

大疏云、正入雙亡為眞門矣、如是入者則・本覺湛然^{トシテ}名窮果
海一眞非妄外一則・因果圓融、云云鈔云、能所雙寂故曰雙
亡一、門理歷然稱為正入一。入則理無不^レ、契^{ルトキハ}雙亡
則過無^レ不寂一、云云宗鏡錄云、雙亡即亡空亡假一、故名
為寂一、正入只是入中一、故名為照一、而亡而照・故曰雙流一
云云演義云一一修起皆帶本有俱來至果無間道中一時頓圓
解脫道中因果交徹名為得果云云妙覺圓明者、略策云、朗
然大悟、離覺所覺一故名妙竟一、演義云、三諦圓融^{シテ}・三竟
無^レ、為妙竟一、云云二因果圓融三、初標舉、二廣明圓
旨、三結成、今初也

始末該融則因果交徹

始末者演義云始末無二亦信智無二云云略策云十信為始智滿為後云云演義云據果由於始信信依本智而起今不離本智故斯則以因果攝果翻因云云因果者演義云六位相望五位為因妙竟為果又位位之中亦有因果云云演義云因有二種一約本有恒沙性德信解行願等無不具故二約修起謂依本信德而起信心依本解德而起解心云云又云然二因本從本覺牘上起來則二因與本果無尙始覺既同本覺則果全同於二因則二因與始果交徹故因。該海果徹因源云云該融與

(何故交徹苔演)

交徹、言一異義同也、問・因果何故交徹、答、演義云、

不離一心故、云云因果二法・同一心故、以二一貫之故、得交徹故・演義云、因該果海、果徹因源、一二互交徹、云云竟鈔云、因是即性之因故該於果、果是即性之果故徹於因。云云一二廣明圓旨二、初念念果成、二塵塵剎就、今初也

心心作佛無一心而非佛心

此即出現品塵含經卷喻、及出現成正竟文意也、大疏云、割微塵之經卷一、則念念果成。云云笑庵觀復云、塵喻情念、經喻佛智、乃至一切塵喻、一切念皆具佛智云云三聖圓融觀云、然上理智等、並不離心。心佛衆生無差別一故、若於心能了則、念念因圓、念念果成、出現品云、菩薩摩訶薩應知、自心常有佛成正覺、何以故、諸佛如來・不レ離此心・成正覺・故・念念相應則、念念成矣云々大疏云、所以知佛智遍者・無一衆生不レ有三本覺一與佛一軀無レ殊故、乃至彼因中之果智・即他佛之果智、以圓教宗・自他因果無一軀一故、不尅此說衆生有レ果、何名說佛智耶、則玄又玄、非花嚴宗、無有斯理云云問・是如來成、何為衆生成乎、答演義云如來成即衆生成矣云云又華嚴問答云一乘中佛自他並同成故已成以去非住果地不修因行或成佛與一切衆生前前已成後後亦成十世九世無不成時同一緣起因果故云云二塵塵剎就處處成道無一塵而非佛國

此明圓教稱性佛剎也餘教未有稱性之談故則不能塵塵成剎也唯圓教意一一塵中皆約稱性故皆成佛剎故觀復云今約塵塵稱性故得偏諸剎塵思之云云大疏云塵塵皆成正竟已為無

盡方是正覺一門有如是無盡成正覺門如出現品弁云々長水

云故知准華嚴所說無有一心不是毗盧遮那佛心無有一塵不

是華藏世界海云云三結成

故真妄物我舉一全收心佛衆生渾然齊致

故者孝經正義云因上逮下之語云云謂由靈知之心入心入境成因成果是故致使真妄依正融徹無尋言真妄者演義云真謂理也佛也妄謂或也生也亦生死涅槃云云舉一全收者問若依大疏云真妄交徹即凡心而見佛心不云即聖心而見凡心今何明真妄互収乎答彼約不壞相此約理性融故鈔云若依交徹亦合言即聖心而見凡心如濕中見彼故如來不斷性惡又佛中有衆生等若依此義合云真妄交徹凡聖互収今不尓者若約理融實即真妄互有今約有不壞相但明凡即同聖以即真故而聖不同凡無煩惱故如彼即濕而濕未必即彼有靜水故靜水說彼有動之性无動之事波中說濕動濕俱有云云心佛衆生者大疏云若依舊譯云心佛衆生三無差別云云又云心是惣相悟之名佛成淨緣起迷之作衆生成染緣起雖有染淨心跡不殊云云問若不解三無差別有何不可乎答演義云謂佛已成道功德難思我心妄或則名為劣雖無功濫不了真源心佛衆生三無差別理故為顛倒耳云云渾然者觀復師云混融也云云即混合為一之義也是則三無差別故云渾然齊致也三結屬迷悟三初結差依迷一

金沢文庫本「心要洞玄記」について（納富）

是知迷則人隨於法法法万差而人不同

二結一依悟一

悟則法隨於人人人一智而融万境

是知者領上起下之辭言迷則人隨法等者達磨大師之言也正法眼藏云達磨大師安心法門云迷時人逐法解時法逐人云云法法万差者謂衆生迷本心妄見万差法謂人則四生九類形色不同境則森羅万像衆相差別故首楞嚴云一切衆生從無始來、迷已為物失於本心為物所轉、故於是中一觀大觀小、迷真性之已、成色心之物、色心已成真性即陰云云人人一智者、即指普光明智云一智也、謂以普光明智・量同虛空、無有一佛不從本智而起、無有一衆生不從本智而生、故知佛及衆生皆以此智為惣身、故演義云、說等、說妙、亦是約位、普光明智、不屬因果、該通因果、其猶自竟聖智、超絕因果、為因果依。方究竟乃至若因若果、皆是普光明智差別之德、別常依普不相捨離、云云融万竟者演義云、非唯有情・會萬類相、為佛身、無レ不皆成、故肇公云、會万法而成己者、其唯聖人乎、三證入果海、初舉果相、二示契會、今初也

言窮慮絕何果何因躰本寂寥孰同孰異

演義云、若入理・言窮慮絕、云々 何果何因者、演義云、名
因一名果^{ノルト}、躰無前後、故得圓融^{スルコトヲ}雙存亦因亦果、俱泯則
果海離言云々 略策云、欲令忘言得旨、故稱果海離言、得意
忘言、因果本^ヲ能所、云々 行願鈔云、但以相對義門^ヲ強名因
果心境^ヲ、今既證窮念絕何果何因、因果心境・一躰無異
故、云々 踰本寂寥者、略策云、語理實^ヲ則寂寥虛曠故經云
法性本寂無諸相^{ニシテ}、云々 行願鈔云・寂者無聲、寥者無色^ヲ、
云々 孰同孰異者、尔雅曰、孰誰也、華嚴論云初水後水一性
水因佛果佛一性佛乃至究竟非同非異非自非他以離言智境
界故云々 二示契會二初直示二喻顯今初也

唯亡壞虛朗消息冲融

唯者・簡別之言、亡壞者・大法句經偈云、雖誦千言、色情
逾固、不如一解心境忘壞、云々 又梁僧傳曰、夫忘壞於万物
者、彼我自^ヲ得矣、云々 外教之中・文選曰、物我俱忘懷^ヲ、莊
子曰、虛空其心^ヲ寂伯忘懷^ヲ、云々 李士表曰、心亡為忘^ヲ、云々
亡忘字異・絕滅義通、虛朗者・肇論云、聖人其心獨朗、云々
疏云、朗明也、謂般若之心・獨自朗悟云々 消息者、演義云・
疏云、朗明也、謂般若之心・獨自朗悟云々 消息者、演義云・

日月盈虛^ヲ時消息^ヲ釋云、消盡息生也、謂可^レ加則加、
可^レ減則減、可^レ出則出、可^レ沒則沒故云消息、云々 冲融者、深
朗和通之義也、言冲和融通不偏不側之意也、故演義云、
冲^ヲ亦深也亦云中也亦曰冲和故老子云道冲用之或似不盈融
者融通兼深廣乃至亦如冲和之氣生成万物而不盈滿融通万
法令无障導云々 二喻顯二初理智交徹喻次能所雙寂喻今初
也

其猶透水月華虛而可見

其猶者其近目之名猶不上之稱也月華者文選江文通詩云月
華散前墀又云月華始徘徊言月光也今云透水月華謂水中月
也虛而可見者長水引經云如水中月寂而常用斯之謂也云々
次能所雙寂喻

無心鑑像照而常空矣

無心鑑像者演義云懸鏡高臺即無心虛照万像斯鑑別不揅妍
蚩^ヲ故云云鑑像者、廣韻曰、鑑鏡也、像似也、象也、照而
常空者、起信論云、一切法如鏡中像^ヲ・无^カ躰可^レ得^ト、云云
言^{ハシ}明鏡無^{ハシ}心^ヲ而自現諸色像^ヲ・一一自照^ヲ、其所照者無別
所照^ヲ、但是本明^ヲ、當現^レ物^ヲ時^ヲ即名為照^ト、色像^ヲ時^ヲ・鏡
中無^レ物、唯有鏡明^ヲ故曰照而常空矣、故合^レ法者、大

疏云、理智形奪^{シテ}雙亡寂照^{レハヲ}一則・念念皆是華嚴性海^{ナリ}云云 上來

・釋心要竟

心要洞玄記一卷

右・心要之為書也、文麗義深言簡旨廣、探赜索隱、原始要終、莫大乎斯書者乎、智照山中行學餘閑・講閱味斯文義、且教誨學徒・如涉水無津涯、故纂輯已所見・綴叙一卷・名曰洞玄記、非望他家披覽、聊以備後遺忘、但其殘文・即假儒士勘鈔而已、應長壬子歲、〔暮か〕莫春二十〔住か〕日・□松谷沙門・釋智照・誌』

(注)

(1) 「離」の紙背に「アキラカナリ離^{アキラカナリ}」とあり、「離」の右側に「カ」ル・キシ・ハナル・アフ」左側に「ワカル・ミナミ・ワタリ・ナラフ」と並列に訓が記されている。

(2) 上欄に「初祖云了々常知言之不及云々」と二行に記されている。

(3) ○印部分に「一来釋一心法界竟若依起信論即當所入一心矣」を挿入した後抹消してある。

(4) ○印部分に湛睿筆にて「但覺鈔云心要又云一念不生前後際断修^{即頓}照體獨立物我皆如^{即頓}悟也□□云一切□□□不思量言下自絕念想修^正□念想心也」□と挿入されているが抹消されている。

(5) 「大慧禪師」の紙背に「大慧禪師書^{苔張}提刑^云如人飲水冷燠・自知說・與人不得似人不得先德云語證則不可示人說理則非證不了自證自得自信自悟處除曾證曾得已信已悟者方默契相契未證未得未信未悟者不唯自不信亦不信佗人有如此境界文」とある。